

れないが、国歌だからイヤである。制度的には「君が代」は国歌ではない。祝祭日式典類だそうである。だ、たら、どうして起立しなければならぬのか。どうして直立不動でなければならぬのか。天皇が現人神であった時代、「陛下」ということばを奏する時に、「気をつけ」の姿勢を取ったことを連想させる。

書の話によると國學者大には校歌がなく、卒業式には「君が代」が演奏されるのだと云うのである。丁度、書が卒業の頃、小山重三氏が、「君が代」に反対したが通らず、小山氏は、だ、たら自分の編曲でやらせてほしいという条件を出したと云うのである。當日、「君が代」のメロディーは編曲によって解体し、まるで古代の曲のようであったという。

私は卒業式に熱心になれないタイプである。高校の卒業式は講堂が狭いため、在校生は代表しか入れなかった。父兄など来やしない。丁度、学生反乱(俗にいう大學生争い)のただ中だったため、我々三年生は、生徒会長が答辞で学校批判でもれるものと思っていた。ところが「桜三月」という調子だったため、みんなが失笑してしまった。まるで緊張感がなかった。大学へ行くと、ここにかく沢山の学生を召集のたら居候だというので、入生式も卒業式もなかった。そういう状態が四年間つづいた。一年休学した為、遅延して卒業することになった一九七五年三月、卒業式が数回、ボリに体育館で催された。これを「正常化」と当局は称している。あやしいものである。私は無論、出席しなかった。卒業証書は理学部の事務室へ行ってもらった。それで十分である。

オーウェル流行

池田

REMARK

一九八四年が到来し、オーウェルがマスコミに盛んにとりあげられている。『オーウェル評論集』(中公新文庫)を読んで、オーウェルがまじった。私は、晴しくて仕方ない。しかし、今日も下半期にだけは、ブームも下りになるだろう。

平凡社が『オーウェル著作集』全四巻を再刊しないのも、平凡社が『オーウェル小説コレクション』全五巻を上半期に刊行してしまいうのも、その辺の誤みがあるのかもしれない。

ところで、私は一九八四年『S下』であるとも思わないし、オーウェルを予言者とも思わない。オーウェルの思考のパターンに共鳴するものである。オーウェルは「制度化した私」に敏感であった。ヴォネカットと同じである。今の自分の課題は、オーウェルの方法論を把握することである。

それにしても、オーウェルに関する雑談論文には、ずいぶん、雑なものがある。たとえは、『諸君、三月の「シニニ」』オーウェルが怒るぞ、まかり通る『一九八四年の歪曲』。書の手は、東京外語大教授の志水達雄氏。これは、

『一九八四年』はソ連型共産主義社会を批判した本で、それを前提にしている論がまかり通っている論する。た、かにその通りである。しかし、この論文自体が非常にズルい構造で出来上っている。『一九八四年』はソ連型共産主義社会の描写であることを、ソルニニツィーの『収容所群島』を証文として論じたりするのである。オーウェルが『収容所群島』を読んだと云うのか。読んだわけがない。書かれていなかったのだから。これでは、ソ連が『一九八四年』型社会であることの証拠とはな。ても、『一九八四年』がソ連の批判である証拠とはならない。『一九八四年』がソ連型共産主義社会の批判として書かれたことは明らかである。しかし、それだけがオーウェルの意図だったろうか。だとすれば、なぜオーウェルは小説という表現方法を選んだのか。『一九八四年』はプロバガンダ小説として読むには、あまりにも面白すぎる。志水氏は反共意識が強すぎて、学者としての倫理を忘れてしまったのではないだろうか。学者は正義の味方であるのではなく、真実を明らかにしてほしい。

『週刊読書人』の五木康之と栗原彬の対談、記者新庄甘夫の解説が妥当である。

森崎サンの新作映画に期待する

池田

FILM

昨年、久しぶりに『時代屋の女房』で劇場用映画を撮った森崎監督は、今年、すでに『喜劇 生きてるうちが花なのよ死んだらそれ迄』(キネシタ映画作品)を完成したようである。キネマ旬報5月下旬号「試写室」の宇田川幸海氏の評によると、混沌たるモリサキ映画であるようだが、いったい、どこで上映されるのか、はたして上映されるものなのか、わからないが、ぜひ見たい。森崎映画の扱われ方といったら、ヒドイものである。ATGの『黒木木郎の愛と冒険』でさえ、16ミリ版やビデオ版が作られない状態なのである。観客は何を見ているのだろうか。感動も手強なものになったのではないだろうか。東映の『喜劇 特出しヒモ天国』という傑作も名画座で不運に扱われ、テレビでも放映されない始末。今回の新作も題名で入る客もいなかろう。脚本、製作の経緯等、御存知の方、おしえて下さい。松竹の今年のラインナップに、『ザ・ロケーション』が挙げられている。ピンク映画の制作現場の秘話である。松竹で、どこまで作れるのかか不安だが、これも期待できる作品となるだろう。

『喜劇 生きてるうちが花なのよ死んだらそれ迄』(監督)については、お金のキネマ旬報3月上旬号の対談で森崎さんが、少しふれ、個人的なプロデュースにアタックしていくしかないと言っている。森崎さんは作りたいものを作ったのだらうか。『時代屋の女房』はちょっとアフションがらなくて苦しかったらうから。

前田陽一監督の『喜劇 家族同盟』は傑作だ。…… 池田

FILM

『男はつらいよ』口笛を吹く寅次郎と二本立てで封切られた『喜劇 家族同盟』は傑作だった。川を下る舟を追ってカメラが川沿いのドヤ街や労働者を映し出す。『虹をわたって』の舞台であったタルマ船を見える。カメラは川面からパン・アップして橋の下側の黒に監獄者、佐々木照一郎の『紅い花』ならびたすら川面を映し出し、そこを離れないところだが、前田さんの視点は、舟の外へ、舟の中へ、ひん

ぱんに変化する。これから始まる複雑な関係を予感させるかのよつなアツボがある。次いで浮浪者の靴、これがタップしている。カメラがひくと、有島一郎が子供たちにタップをしてみせていたことがわかる。勿論、ケリーやアステアのタップには比べようもないが、有島一郎のさしてうまくないタップで始まったことが嬉しかった。このタップはニセモノで、決して悪気がいいわけではない。しかし、ニセモノ、はいとこころが、シヨボクレながらも一心なところか、いいのである。次いで、有島は、ベンチに坐っている中村雅俊に、「イメーシだ」という。息子の役をやつてほしいと頼む。有島一郎が「イメーシ」というコトバを使うところか、何ともおかしい。しだいにメンバーがどう、て感懐ぶこになる。川を見ながら横溝大空襲の話をする有島。『喜劇 日本列島制度0』でフランク・堺が、みぞ汁かけコハンで、戦後へのこだわりを表現していたように、前田さんの戦後へのこだわりは、観客を熱くする。前田さんも体験したであろう横溝流労働者や寿町のトヤの人々、浮浪者や日雇労働者に対する

暖かい見方。ラスト近く、中村雅俊と中原理恵が歩く寿町の道には、多くの労働者が映し出されている。ニセ家族のメンバーがよくいう「イッパン敷袋では」というコトバが皮肉にひびく。登場するだけでミヤコ蝶々はおかしい。映画の要諦は中村雅俊と中原理恵ではなく、むしろ有島一郎と川谷格三にある。失った家族を求めようとする老人と、家族になりそこねて死んでしまう青年。血のつながつていない、いわば他人同志が家族として生活するという設定は、森崎東が、女生きてます。シリーズで展開してみせたものである。『喜劇 男は嫁様』にもそれはあった。森崎さんは、血のつながつた家族関係の徹底的な破壊へとときには破壊した。どうして個人に戻った人間たちの、新家族々々を希望をこめて描いてきたのである。私たちは、みんなバラバラ、ひとりぼっち、だから結びつけるという希望を、前田さんは、ひとつの意志につかれて集まった人々の離反と再集合を声高く描出した。

運筆を求めて孤往を感せず
力及ばずして倒れることを嫌はなむが
力尽くやむして挫けることを拒否する

ノンセクト・ユニディカル

池田 博明

FEELINGS

かつて学生叛乱があった。
かつて全共闘があった。
かつて高校紛争があった。

かつて連合赤軍の「総括」があった。

それらは私の高校、大学時代にあった。私は「ゲバ棒」をふり回したこともなく、機動隊に「サンドイム」を投擲されたデモ行進に参加したこともないが、「ノンセクト」といわれる無党派派ではなかつた。おそらく当時の学生は、ノンセクトであることは許されなかつたのだ。一たり顔して批評すれば、「君自身にとって、それはいったい何なのか」と問われた。何でも自分の考えを持たざるをえない状況だったのだ。どこもか「こも討論する学生をいっはらぐ」であつた。無論、討論の場を占めた遊り、当りずとわらう学生も多かったが、それだつて、そんな遊樂を維持していくのは、けっこう大変だつたのだ。

当時身に付けた感覚、たとえは報道の不正、たとえは道義有理(大衆が反乱を起すとき、その中には一定の理がある)という感じ、たとえは自己否定、たとえは民権(代々木系、民主青年同盟の路)が三派系学生を暴力学生と規定し、あつたことか、大学側に加担し、学生運動を圧殺したこと、たとえは悲惨な内ゲバ。これらについての感覚は、今でも思い出し出されてくる。今の自分を作っているのだ。

当時、私は矛盾を抱えていた。だいたい、受験生であつたとき、学生が大学側を叫んでいたのである。なぜ、当の学生が否定している大学に俺は進もうというのか。「やりたい学問があるから」という結論を出してみたものの、我ながら確信できなかったのである。

高校三年当時、私は渡辺一夫の寛容についての論や、フランス・ルネサンスの状況、カルヴァンの人生についての論に感銘を受けていて、暴力に批判的であつた。しかし、学生のいついことにも一理あると思つた。そして、どうとう自分もその大学生になつてしまつたのである。一九七〇年のことであつた。

一九七〇年六月十四日付の手紙——図書館が封鎖され、機動隊が導入されたことは、十三日の朝、ニュースで報道された。ラジオしか、僕は聞けなかつたが、叔だが、聞いていてあきれかえつてしまつた。ニュースでは「試験に反対する」学生といつたが、なぜ、この試験に反対しているのかといふことはいれない。また、「学生たちは、なつら抵抗もせず」といつた。これを聞いた一般の人々に、遊びのつもりで封鎖したと思つても仕方がない。それに、「なつら抵抗もせず」とはなにどこか。まるで、抵抗しなかつたことが良かったかのようである。これから、学生運動については、報道が多くなされるだろうが、うかつに価値判断をしないで欲しい。「かもしれない」と思つていて欲しい。僕は暴力を支持してはいないが、いい加減に報道されることか、そして、誰もそれをいい加減な報道であると思わないことかがいせなのがある。少しもいいから、反骨精神を持ちたい。これは弟達への手紙であるが投函しなかつた。手紙には、また続きもある。十四日から二、三日後に書いたものだろう。自分の感情の未熟さに、いや気がせいで、投函せずじまつたものである。自分ながら笑うべきことを書いていたが、それを次に記しておこう。当時の雰囲気伺えると思う。

—— 土曜、日曜、生物の時間、反戦連合のものが、ドヤドヤ入つてきて、

「この時間を討議にしたいから、時間を下さい」という。生物の明峯先生は「多くの時間は生物以外のことはほしくないことにしている」といい、「ここに講義を受けに来ている人たちも考えているし、ほくも考えている」といったが、彼らは、「先生は教養に於ける学問を政治的にどう考えているか」とか、「この急迫事態に講義をするなんてナンセンス」とか、「大学も社会の中で存在しているから、政治と無縁ではない」とかいう。先生は、「ほくが学問についてどう考えているか」ということは、ほくのところに来て、聞いてくれれば話す」と言うのだが、彼らは、「ここで明らかにすべきだ」という。我々の方からは、彼らに対し、「出ていけ」とか、「俺たちは学問がどんなものか解らん。解らないが故に知ろうと思っただけだ」とか、「そんなに政治がしたまや、北大をやめりゃいいんだ」という声が出たが、彼らはあや笑う。彼らは、こちらの論理のズキをうけてくるが、自分たちの意見を前面に押し出すとはしない。なんでもかんでも「論理的にいつてくれ」という。なんでまた、こんなに論理、論理といふのか。論理ですべてやりきれたら問題はない。認識といふものが各々にあるといふことを彼らは知らないらしい。「俺はこれだいいんだ」とでもいおうもんなら、「そら、居直ってるじゃないか」と来る。こっちが何かいふと、「居直ってる」「居直ってる」だ。馬鹿のひどく覚えみだした。「ナンセンス」よりはゼンスがあるが、いやなことばだ。なんでも、これでは片づける。「君たちは、学生という特権に甘えて、それを利用して、現実を目をつぶろうとしてる」といふ。学生が特権階級であるといふことを知らない知っている。その枠で、一体、どうすればいいといふのか。「お前ら、革命家になりゃいいんだ」という声も出たが、彼らはあや笑っただけだった。「君たちは間接的に人殺しをしているんだ」といふ。これは、アメリカの侵略行為に対して何ら具体的な行動をしないのを批判しているのだ。なに言ってるんだい。俺たちは間接的かもしれないが、お前たちはヘルメット、

ガバ棒で、直接的に人殺しをせよ」として居るじゃないか。「人殺しをしている」なんておどかしたって、簡単に信じるもんか。俺もワワア言っただけだ。「社会と我々は結びついてる」「どうだろう」「社会にはいまばかりじゃない。いつでもいろんな問題がいっぱいあるんだ」「どうう。だから……」「だから、それですら関係づけられたんじや、いつでも議論してなきゃならないんだ。歴史観とか価値観とか、そういつたことをすべて考え合わせなきゃならないんだ。そんなことができるか。適当なところで議論もし、適当なところで授業もやるんだ。そうしなかつたら生きていけないから」「そら、居直ってるじゃないか」まったく、なんといつていいやら解らん。「適当に妥協しなきゃ、生きていけないか」と言ったら、「じゃあ、強盗や殺人が身边でおこっても、それはどうでもいいってことなのか？」などという。「おんなじ次元でいつた」といふと、「居直ってるじゃないか」だ。俺は声の通りのいいことでは負けぬつもりだ。彼らが四、五人いっぺんにワワア言ったところで、その上を通すだけの自信はある。それで、いろいろこなしてやっただ。今、考えれば、先生が事を何とかしようとしたのに、俺がワワア言っただ。彼らの思つっぽにはまったかもしれない。が、彼らも、何も言わないで引きこがる気はなかつたらしい。「このまま、生體の授業を受けたい人等手離します」とある人が言っただ。全員が拳銃した。「こういうことだから出ていってくれ」といふても、「いや、こんなこと以前の問題なんだ」と言い張る。だから、彼らもはじめ、から、おどろく出ていくつもりはなかつたろう。先生が「ほくはこの時間では生物学以外の講義をやったことはない。けれども、君たちの先輩たちは、ほくの講義から社会といふものをやはり感じてくれたし、考えてもくれた。ほくは情熱をもつて教えているんだ。この講義をするといふことは、ほくの義務なんだ」「義務、それはどこから与えられたのですか?」彼らは政府まで発展させたいのだ。「こゝは

「トリをどうして。」「きみたちが、そういう態度をとればよむだけ、ほくは、きみたちに同情できなくなるじゃないか」「同情なんて。そんなもんじゃない」「同情というものは、おられぬという感じがないんだ。もっと日本語を勉強して」「……」「軍配は先生の方になりそうだ。我々が、我々の講義を聞く自由を奪うな」といって、「その自由は心から手えられたものか。」「と果て。学生といつてからたなごといえは、彼らの思いつくほど。黙っているのはいい。30分もなやかせといつて、どうして先生は彼らを見殺して講義をはじめた。彼らは後で、先生の態度を批難する。俺は後の方へすわっていたので、講義が聞こえん。一番前へいって、机と机の間の通路へすわった。我々はみんな彼らを見殺し、講義を聞いた。そのうちに「閉鎖的に人を殺している」だの「先生、また来ますからぬ」と言い捨てて出ていった。「先生、また来ますからぬ」と言ったのに対し、先生は「ああ、どうぞ」と言った。我々は失笑した。明峯先生は、30年間、教養で講義をしている植物学者である。あと数年で、定年退官だ。マイク授業は母かんのだが、言があまり出なくなったので、仕方なく、マイクを使う。だが、とにかく、「信念」を持って、学生に負けないことがいい。話し合う姿勢を捨ててはいない。それに説教である。そして北大を愛している。感情的な意味だけに限らずに。こつも言つてやった。「自分のことをよく考えてみる。自分がいかに社会といつものと多くのところをつながつているか。そして罪悪をなしているか。それを毎日考えたらう生まれてやけるか。」「居直、てるにせないか。」「どう言つてやりたかった。」「居直る、居直る、っていうな。態度を急に改めておどすといつことだぞ。俺がいつおどした、っていうんだ。おまえらの方がむしろ居直、てるじゃないか。おまえらが、人類の不幸を推進していることが解らないのか。俺の方がおまえらの方、ちゃんないデオロギーよりも、ずっと深い人間に対する認識をもっているんだ」と。

あれから十四年もたった。実は、理は「我々」の方にはなく、「彼ら」の側にあったのである。しかし、そこまでわからなかったのだ。ただ自分たちが批難されて、カチンと来たのであった。私の認識など、決して深くはなかったのだ。本質論を押し付けていくところに、「彼ら」の力があつたのである。ただ、「彼ら」には当然と理解されてしまつたところが、「我々」が新生には、当然と思えなかつたのである。性急な前衛意識が「彼ら」の方法の性急さの原因であつた。高橋でも叛乱があつた。

七月四日の日記から——札幌前高の生徒がら項目要求して授業放棄している。今日二五。人程がデモ。二十九日から臨時休校。六日こつて、この際、一足早く夏期休業に入つて、平靜にもどるようには、という意見が強いといつ、申さようね！ そう言う他ない。そんな手段をとつたところで一時的のぎにすぎぬ。こんな対策ばかりしていると、そのうち「本校立法」をやらせざるをえなくなる。

七月七日の日記から——心配した通り、昨日から、学校（札幌前高）側の休講措置に閉して、30人の生徒が校長室前に坐り込んだ。昨日の報道によれば、休みにして、ひとりひとり教員が別訪問して話し合うといつことだつた。それならまだしもいいと思つたのだが、その後の教直（ラジオと新聞）によると、教員側は乗り気でないらしい。今日のラジオニュースでアウンサーは、不用意にも（かどうか知らないが）「冷却期間」といふことを使つたが、どうも当を得ているようだ。話し合つて、どうするといふ意志は、ほとんど感じられない。ただ、どうでもいらいから、とにかくうまくおまひよつという強胆だ。生徒は暴力行為に出ている訳ではない。それなのに学校側の態度が、これでは、全く遺憾だ。昨年の大卒紛争当時、大学当局側の無策・無能が攻められた教訓を、さつとも生かして、いない。白紙者が出た

り、暴力に訴える行為が出る格好は充分ある。そして、そついつものを引き出した責任は、むしろ学校側にある。校長は校長室に監禁された形になったが、今日五時三十分PM頃、医師の診断を受けてから、他の教員に保護されながら、強引に脱出らしい。坐り込んでいた生徒たちは、坐り込んでいた目的がなくなったので、あどかたすげをして、帰った。——

何れとも政治的な時代であった。政治的であることはフツウのことであった。現在でも、フツウのことであるはずだ。

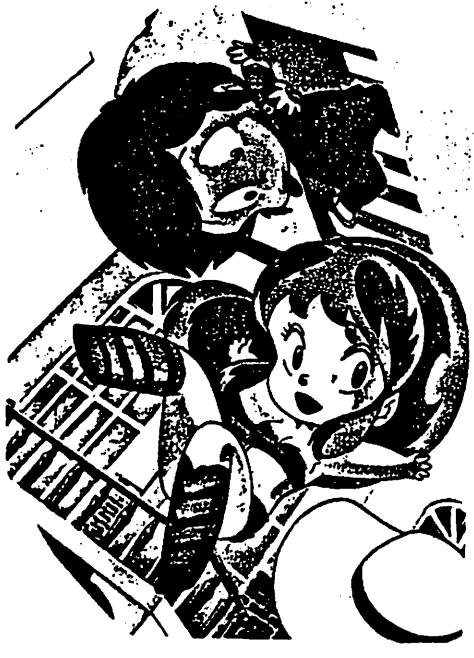
巻頭に掲げた「連体を求めて孤立を恐れず」云々は、東大闘争の際の全女闘の落書きだ。いい言葉だ。カッコ良すぎて、とても声に出してはいえないが。

映画『うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー』は傑作だ 池田 大塚一樹監督『すかんぴんウォーク』と二本立てで封切られたアニメ映画『うる星やつら2』は傑作だった。パンフレットも良く出来ている。パンフレットの表紙はエッセイの階段の所々に「うる星やつら」を配置したものだ。論理をたどることによって、奥次元空間を生み出してしまふエッセイの世界は、夢の中で夢を論理的に解こうとする『うる星やつら2』の陰謀である。それに、パンフの表紙の「うる星やつら」は、子供として描かれている。ラムは、子供の体型（つまり三頭身のラムである。サクラ先生も白衣を着ているものの、体型は子供。他の面々も同様である。映画の本筋には、子供の「うる星やつら」は登場しないのだが、ちょうど、ギョウスター・ガラスが『フリキの太鼓』で成長を止めた子供を主人公にして現実をファルス化したように、「うる星やつら2」は「うる星やつら」をファルス化することに成功したのである。

『うる星やつら2』で、観客と一緒にになって絵解きをする探偵役は、友引高校の養護教諭、サクラ先生である。しかし、サクラ先生は、登場人物であるから、

私たち観客よりは、見聞の範囲が狭い。観客には、いろんな所で同時に起っている出来事が、わかっている。サクラ先生は状況を必死で探ろうとする。観客は心の中で声援をする。「カンバリ、サクラ先生……」。

映画は決して夢の解説などもしないし、つじつま合わせもしない。ただただ前へ前へと話が進んでいくだけである。夢が本筋に現実になったり、きつこつなるという思いがする。つじつまを命めせたり、合理化したりするのは、夢がためてからのことだ。しかし、さめないうらに世界が変わり、つまり「こと」がある。いつか、似た語を続けたな。なんだったろう。そうだ。ル・グインの『天のうろこ』(サンリオSF文庫)である。そして……『ディックの諸作品である。たとえば『ノーマー・エドリックの三つの聖痕』『ユーヒック』『火星のタイムスリップ』『死の迷宮』。そこでは、夢はもうひとつの確固たる世界である。魂の守りぐファンタジー・ワールドではない。崩壊をほらんだ現実である。『うる星やつら2』は、常にパニックへの契機をほらんだ危うい現実へのラブ・コールとなる。スラップスティックである。現実には、いくつも変動の引き金があるんだよ。崩壊を期待するんだ。崩壊が大きいほど、解放感も大きいのだ。そして、喜劇のいいところは、主人公が決まって死なないことである。生命カに対する無限の信頼！



中江兆民への関心

池田 博明

元日に、なだいなだの『TN君の伝記』（福音館書店）を読んだ。幕末から、明治を経て大正に至る時代に生きていた人々の「夢」が気になった。なだいなだが坂本竜馬について書いている言葉が印象に残るからである。

現実的な人間より、夢を見る人間の方がするどいとは、おかしなことだとTN君は思った。（43頁）

『日本の名著、中江兆民』（中央公論社）を開く。解説（河野健二）を見ると、なだいなだか兆民に託した意味がはっきりする。兆民の内面を描いた記録は十分残っていないのに、『TN君の伝記』ではかなり立ち入って書かれているからである。

たとえば、兆民が十四歳の時、激怒してガキ大将を刀で傷つけたことがある。TN君のその時の感情を、なだいなだは次のように描く。

なにか、自分の中にあるものが、はげしくあばれだした感じだった。彼は、相手の子供の目が、悲しげに、おびえたように、自分を見つめているのに気がついた。そのとき、TN君は、刃物が、相手の傷口をえぐったよりも、もっと深く自分自身の心をえぐったような、痛みを感じた。彼が傷つけた子どもは、刀を持たない階級の子どもだったのだ。

この情景は印象的である。このとき以来、兆民の暴力に対するおそれの感覚が彼の行動の根底にあらわれるようになる。兆民が革命家とならずに、学者となったことの原点がここにあったように感じられる。そして、なだいなだは、TN君の信条をアコラス先生の言葉として次のように描く。

学者は、ただ見たものを忠実にいう。正しいことを正しいという。ただそれだけなのだ。だが、だれにはばかることなく、それをいう。いわねばならない。どろぼうのいうことが眞実であり、裁判官のいうことがうそだったら、そういうまでだ。そういうことだって、ありうるからね。裁判官のいうことが、つねに正しいなら問題はないのさ。しかし、そうでない時代がある。そのとき、学者は、危険人物になる。（112頁）

より自由になるという事とは、より進歩することではない。より文明開化することではない。ひとりひとりが、より自己に目覚めることだ。だれもたよりにせず、だれに支配もされずに生きることに目覚めることだ。（155頁）

なだいなだとTN君がグブるように思える一節である。

危険な世代について

出張で山形県立山形西高校に行かれた先生のレポートが、教頭の机の上にあった。なつかしい校名なので、のぞいてみた。山形西高校は、昔からの女子高校である。男子校だった山形東高校に女子が入学するようになって、少しレベル・ダウンしたとか。それでも、山形大学を中心にほとんどの生徒が国立大学をめざしている。レポートには、もと地元民にとってはそれほど目新しいことはなかったのだが、職員の年齢について、びっくりするような話が出ていた。質問によって、西高の先生が答えたのだそうだが、30代の教員の割合が低いのは、この世代は大学紛争、全共闘の世代で、生徒の人間性の回復などを主張するため、他の職員と足並がそろわず、結局、生徒の学力も下がってしまうだろうというので、採用しないようにしているのだそうである。現在、数少ない在職中のその世代の教員は他の教員が協力して封じこめているのだそうである。

このレポートは管理職をへて教育委員会へと提出されるものなのだ。なるほど他人を中傷するのにうまいやり方があったものである。いかにも、社会科学的な分析がしてあるようなかっこうのレポートである。レポートを書かれた先生が30代なら、むしろ感心してしまうのだが、50代なので、いささかがっかりしてしまった。同じ言葉でも語られる状況によって、意味が変わってくるものなのである。もっとも、これだけ山形西高の先生に評価されているのだから、喜ぶべきことなのであろう。しかし、よく考えてみれば誰にもわかるが、話が単純すぎる。

大学の教養時代の同級生が、彼は民青に所属していたが、あるときこう言った。「世代間の断絶より、同世代の横の断絶の方が梁いし、悲しい」と。それを象徴した事件が連合赤軍によるリンチ殺害だったのだらう。

つまり、30代などとひっくるめて総括できるようなものは、まずは眉唾であるということだ。それは、自分の友達を考えてみてもよく分かる。

しいて言えば、人間関係について、単純な世代論を信用しないというところ、みんなバラバラであるということを出発点とするところが、特色であって、しかも、他の世代から見たときに、危険とみえる所以なのかもしれない。

大変、光栄なことである。

しかし、たとえば現在、教育についてもっともラディカルな提言をしているひとは、板倉聖宣である。全共闘世代より、もっとラディカルで、しかも広汎な支持を得ている。彼は、30代であろうか。彼は、今年54才である。

渡辺一夫とヴォネガット

はじめて、ヴォネガットについての研究読本が出たが、ひどいものである。北栄社の本『吾が魂のイロニー』がそれである。ちゃらんぼらん文章があつめてある。編集した三田格氏の編集後記がわけのわからぬ代物である。「ヴォネガットのことを書くともみんなエッセイになってしまう」という。ここに集められたものがエッセイだとしたら、モンテーニュや、渡辺一夫のそれはどうなるんだろう。「研究」の名にあたいするものとして、タナーの論文の訳を転載したという。本気でそんなことを思っているのだろうか。研究とエッセイをどう区別するというのだろうか。随分、権威主義ではないか。

この本を読んだからといって、ヴォネガットについて、新しい理解が生まれるとは思えない。書き手がヴォネガットと真剣に取り組んでいないのだから、しょうがない。以前、『海』に載った池沢要樹のヴォネガット論が転載されているのが、せめてもの救いだ。他の文章はすべて二足三文である。疑う人はぜひ買って読んでみたら。

ヴォネガット論として書かれたものではないのに、すぐれたヴォネガット論として読めるものもある。それは、大江健三郎の『日本現代のユマニスト 渡辺一夫を読む』（岩波書店）である。大江氏は、十六歳のときに渡辺一夫の『フランス・ルネサンス断章』を読んだから、ずっとこの本の影響を受けつづけてきたという。僕もまた、高校3年のときに、『フランス・ルネサンスの人々』（白水社、『フランス・ルネサンス断章』改訂版）を学校の図書館で読んで以来の愛読者なのだ。

大江健三郎は、渡辺一夫とヴォネガットとオーウェルを「decency」と言う言葉をキー・ワードにしてつなげる。この三人は私がおっとも好きな書き手でもある。渡辺一夫には高校時代に出会い、ヴォネガットには大学時代に、オーウェルには就職してから出会った。そうだったのか。これらの出会いはしかるべく予定されていたものに違いない。僕は新しいものを発見したのではない。ただ自分の心の中にあつたものと出会っただけなのだ。それも、高校時代にすでに出来あがってしまっていたのか。なんだかこわいような気がしてきた。ところで、大江氏は、新潮社のPR誌『波』6月号でヴォネガットの『パーム・サンデー』中のシリーズ論を紹介し、NHK教育テレビの教養セミナーでヴォネガットと対談していた（6月7日夜8時）。ヴォネガットの講演は6月9日夜9時からNHK教育テレビで放送された。これについては別紙にふれよう。

来日に伴って、ヴォネガットの本がおおいに翻訳される。ありがたいことである。伊勢治郎店には、ヴォネガット・コーナーさえある。『チャンピオンたちの朝食』は浅倉久志さんの訳と対照しながら読んでいる。大意はまちがっていなかったので安心した。僕の『チャンピオンたちの朝食』論、「文化の奴隷」を読んでくれる人は、その旨連絡して下さい。

子供の解釈 日本の民話、世界の民話

「大工と鬼六」。〔お話〕 しょっちゅう流される橋があった。流されない橋をかけてくれとたのまれた大工が川をみていると、川の中から鬼が出てきて、橋をかけてやるから、目玉をよこせといった。大工は半信半疑でひきうけてしまった。鬼は二日間で橋をかけてしまった。約束の日、大工が目玉をやるのをしぶると、鬼は「おれの名前をあてたらゆるしてやる」といった。大工がとほうにくれて山を歩いていると、子守歌がきこえてきた。鬼の名前は「鬼六」だ。翌日、鬼に大工はいろんな名前をいった。最後に大工が「おにろくっ!」という、鬼は「聞いたなっ」とくやしがり、消えてしまった。〔解説〕 鬼はせっかく橋をかけたのに、なんにももらえないで、かわいそうだねえ（千洋、3歳）。

「三匹の子豚」。〔お話〕 子豚の兄弟が、それぞれワラの家、木の家、レンガの家を作った。そこへ、狼が来た。狼は家を吹き飛ばしてしまったが、レンガの家は吹き飛ばなかった。煙突から入ろうとした狼は熱い湯の中に落ちてしまい、逃げていった。〔解説〕 狼も自分で家を建てればよかったのに（千洋、3歳）。

子供の本は図書館で借りるのがいい

はじめは買っていたのだが、すぐに読み終わってしまうし、買いたてならない。そこで毎週日曜日に松岡町立図書館へ行って借りてくることにした。ひとり2冊までだが、家族全員の名前を使えば、一度に12冊借りられる。そうして読んだ本が、去年の2月から約15ヶ月で386冊。その中で子供（2～3才と4～5才）が特に喜んだ本を紹介してみよう。大人が読んでも面白い。

まずは『たぬきのじどうしゃ』（偕成社）。長新太の絵本。あんまり面白いので女房が紙芝居に作って保育園にも持って行ってあげたといういわくつきの本。たぬきが自動車に乗っていくと途中で巨大なカエルが沼からでてくるといふただそれだけのお話。

『ノントン ぶらんこのせて』（偕成社）。ノントンは兎である。ノントン絵本は沢山あるが、これが最高。おそらく第一作のこのお話が描きたくって作者たち（大友やすおみ・さちこ）はノントンを作りだしたのではないかな。ノントンがブランコにのっていると友達がやってきました。ねえノントンかわってよ。だめだめ、たちのりするんだもん。また、別の友達がきて頼むと、だめだめ、かたあしのりするんだもん。また別の・・・。

『かちかちやま』（ポプラ社）。松谷みよ子の文がすばらしいことが、音読するとよくわかる。絵は瀬川隼男。お話は知られたとおり。

シリーズもので喜んだのは、チゾンとテイラーの「バーバ」ものと、清水みちをの「ちいちゃん」絵本、松谷みよ子の「ちいさいモモちゃん」絵本。ずいぶん子供の本で面白いものがあるし、図書館には大人の本も沢山ある。自分で買うのが馬鹿らしくなってしまうほどだ。

智月さんの死

池田博明

榑原先生の長女、智月（ちづき）さんが亡くなられた。徳島の海で水死されたのだ。24歳、7月5日のことだという。葬儀が14日（土）、新玉カトリック教会で行われた。

僕には、言葉もない。小田原へ来て最初の半年、適当な部屋がないというので、榑原先生のお宅へいさせてもらった。智月さんは中学生だった。僕は家族のみなさんに、本当にお世話になった。食事から、入浴はもとより、学校のこと、いろいろなお話まで。小田原の夏の花火を2階の智月さんの部屋から見せてもらったこともある。

奥さんは、きさくだが、とても神経のこまやかな方だった。妹の夕月（ゆづき）さんは活発で、姉の智月さんは明るかった。

引越してからは、時折、時候のあいさつに伺うときに家族の方と会うくらいだったが、それも、留守だったりして、会えなかったりした。

1981年のある日、智月さんと伊勢治書店で会った。文学部の学生であった。本を探しているのだという。何かいい本はありませんかと聞かれて、島尾敏雄の『死の棘』（新潮社）をあげたところ、それを買うというので、僕はあわててしまった。その本を抱えて智月さんは帰っていった。別れてから、僕は若い女性の読む本として『死の棘』がふさわしかったかどうか、心配になってきた。そんな心配はいらぬことなのかもしれない。それでも気になってしまい、今度は、サローヤンの『人間喜劇』（晶文社）を買って、持って行ってあげたりした。しばらくして、1981年の10月30日（金）の夜8時頃、電話がきた。「急に思ってた」と前おきして、智月さんは、こんな話をした。『死の棘』を読んで、文学の本質にふれたような気がする、書く側の立場がわかったような気がする、講師に島尾敏雄がいる横浜の新日本文学会に出てみようと思っていると。

卒業後、どうしたのか、わからなかった。年賀状の住所は横須賀のこともあれば、自宅のこともあった。葬儀のときの榑原先生のお話で、卒業してからは「今までは、わかまを言って両親に迷惑をかけた。これからは自分で自活、自立したいと、横浜に職を求め、その合間には、詩を書いていた」ということがわかった。大学時代の友人の故郷、徳島の青い海が、青い空が、白い雲が、白いカモメが好きで、年に数回行ってたのだという。その大好きな海に吞まれてしまったのである。

生きていれば、いつか会える。しかし、死んでしまった人には、もう会えないのだ。なんという欠落感だろう。失ったものの大きさ、それは日がたつにつれ、大きくなっていくものなのだ。

僕達の死んで産まれた長女のことを考える。出産直前まで生きていた。あの子は、そのとき、何を考えていたのだろうか。

子供が生きて産まれること、子供が元気で育つこと、それが当たり前のこととは、とうてい思えない。いつも子供の顔に死の影をみてしまう。今日無事生きているのが不思議なくらいだ。明日には死んでしまうかもしれない。

子供を連れて歩くと、死ぬかもしれない、死ぬかもしれないという声がある。だから必ず手を取ってしまう。甘やかしたらいけないと思ったりして、手をはなすこともある。しかし、その間じゅう心配でしかたがない。往来から部屋の中へ入るとホッとする。

生徒を見ていると、どの子もよくここまで生きてきたなあと感じる。これからも、とにかく生きていってほしいものだと思う。

なぜやいな生活を送っている生徒には、つい意見したくなってしまふ。「明日ありと思う心のゆらぎ、夜半に嵐の吹かぬものか」と。しかし、大抵は何も言いはしないのだ。僕は授業以外のところ、あるいはそれに準ずる枠の外で生徒を指導するのを自分に禁じているからである。人間的な話しは努力しなくても出来るはずだし、努力するようになったら、おしまいだと思うのである。生徒は生徒である前に、同時代人なのだから。これは勘のよいものである。

レポートの「感想」の大切さ

池田

生徒にレポートを出させることがある。大学では、実験のレポートは、結果を簡潔に記すように指導された。短くて要を得た論文が一番いいというわけである。したがって「感想」などは書かないのだ。その習慣で、教員になってからも、レポートには「考察」を書くように指導して、「感想」をかくようには言わなかったのである。しかし、最近になって、「感想」の大切さを感じている。

それは、仮説実験授業との関わりのなかで感じたことである。仮説実験授業をしたあとで、生徒は「授業の評価」をし、「感想」を記す。教員はそれを読み、授業を改善していくのである。この感想を読むのは、なかなか楽しいのである。もちろん、授業について面白かったと書いてあれば、気持ちいい。しかし、つまんなかったと書いてあっても、なぜそう感じたのか、考えることができる。このように感じる生徒は、どんな顔をしていて、どんな態度でいるんだろうと、興味がわく。つまり、生徒の方に一歩近づくことができる。生徒の方にしてみたって、「感想」というのは、いわば教員にあてる手紙のようなものだろう。わりと気楽に書いてくる。意外なことが生徒の興味をひいていたりする。

たとえば、今年の「理科I」（1年生）の顕微鏡実習のことである。レポートには「感想」も書くように言った。それに「物差しを見たのが面白かった」と書いてある。顕微鏡の視野の中での長さを計るためのマイクロメーターの説明のときに、「どうすればいいと思うか。長さを計るには物差しを使うだろう」（マイクロメーターというのは、結局物差しなのだ）と言ったあと、ふと思いついて「じゃあ、まず物差しを顕微鏡でのぞいてみよう」という言葉が出てしまったのだ。生徒は、げげんな顔をしてそれぞれの準備から物差し

『暗殺者の家』『間諜最後の日』（ヒッチコック監督作品） 池田

7月6日、文芸座ル・ピリエで、ヒッチコックのイギリス時代の作品を見た。柳下先生と一緒にいった。ル・ピリエには初めていった。中はシネマ・プラセットと似ていた。収容人数は100人位か。金曜日の昼の回だったが、満員だった。見ているのは、ほとんど学生。

『暗殺者の家』は1934年の作品である。今から丁度50年前だ。巻頭、アルプスのスキー場でジャンプ射撃が行われている。見ていた少女の腕から犬が逃げて走り出した。コースへいった犬を追って少女が飛び出す。選手は転倒する。危うく衝突は免れた。

少女は父や、その友人と、射撃場に行く。射撃で勝負を争っているのは、ひとり女性である。少女の母だ。いざ、撃つ直前に、少女がおしゃべりをしたため、母の弾はそれてしまう。次の相手の弾は見事にクレーに命中する。母は負けてしまったが、少女を責めたりはしない。コブ付きじゃね、と笑っている。母はルイという別の男性と一緒に行ってしまふ。その後のパーティから事件が始まる。

声を出したことで弾がそれてしまうということ、母が射撃の名人であるということがクライマックスの伏線になっている。ひとつのクライマックスは、暗殺者の弾をそらす為に、音楽会会場で母は声をあげるところ。もうひとつはラスト近く、屋根の上を逃げる少女が暗殺者に追いつめられるところ。警官は「狙えません」と言う。標的まで、遠すぎるし、少女に当たってしまう可能性があるからだ。銃声が響いて、暗殺者が倒れる。何が起こったのか。銃を撃ったのは母だった。なるほど母は射撃の名手だったのだ。

興味をひいたこと。まず、暗殺者一味の首領に扮したピーター・ローレの雰囲気。それに、暗殺者一味の中に女性がいること、彼女は普段は新興宗教の伝道師である。

『間諜最後の日』は1936年の作品。タイトルを見て、原作がモームの短編集「アシェンデン」であることを知った。集中「売国奴」は傑作で、「世界スパイ小説傑作選1」（選者は丸谷才一、講談社文庫）にも収録されている。映画の方は原作をかかなりアレンジしてある。ギリシャ人の「将軍」に扮するピーター・ローレが実に不気味な演技を見せる。作家であるアシェンデンは、スパイ活動に気がすまない。そのことが、象徴的にあらわれるのは老紳士を雪の山中、谷底へつきおとすシーンである。アシェンデンは望遠鏡で遠くから見ている。宿では、紳士の飼犬が妙に騒がたてるので、紳士の妻は胸騒ぎを感じ、事情を知っている協力者エルサは、不安と恐怖で落ち着かない。老紳士の姿が消えた瞬間、犬は悲しく長く吠える。老紳士の妻はくずおれる。暗殺の後味がなんとも言えず悪いところに「R」からの情報が届く。その紳士はスパイではないというのだ。エルサは、この仕事にすっかり嫌気がさしてしまう。そして、アシェンデンにも辞めるように勧める。話の底に流れる心理といい、サスペンスの盛り上げ方といい、中心になるのはエルサである。女性である。ヒッチコック作品における女性の役割をあらためて感じさせる映画である。

『ときめきに死す』（森田芳光監督、1984年公開） 池田

（これから、この映画を見る予定の人は読まないで下さい）

男は「道具」だった。組織の暗殺計画を実行しやすくする為に、未遂におわることまで計画されていたのである。それを知ったとき、男は自分で手首を噛み切って号泣しながら自死するのである。

女も「道具」である。医者も「道具」である。しかし、彼等は自分が目的遂行のための「道具でしかない」ということを、よく知っていた。だから、直前に「辞める」ことをもちかけるのである。警備が厳重すぎるのだ。成功するわけがないのだから。

男は計画から降りることをしなかった。自分の生のきらめきは会長を刺した瞬間にあるのである。テロリストの栄光。彼は自分が「道具でしかない」ということに気がついていなかったのである。いや、彼だけではない。見ている私達観客さえも気がつかなかったのである。私達は、暗殺の瞬間になにか途方もない逆転劇が計画されていて、成功しそうなような厳重な警備の中、暗殺が成功することを期待してしまっただけなのである。映画はたいいていそんな風に出てあがっているのではないか。ところが あっさり失敗してしまう。なんだ、これは？はぐらかされたような気持ちになる。そして、その後、会長は見事に暗殺されるのだ。組織の予定どおりなのである。

やくざの抗争の際の鉄砲玉が「道具でしかない」ことは、これまでも映画に描かれてきた。鉄砲玉として使われる男の人間性を描き、それが道具として利用されるしかないことを描いて、組織の非情さを表すのが、これまでのパターンだった。私達は、やくざ映画とくに現代やくざもので、「組織と人間論」を学習したのである。それは、映画館の暗闇の中での大変面白い勉強だった。

ところが、『ときめきに死す』では描き方が全然ちがっているのである。ひんやりした北海道の風景。夏の海辺は、たいいてい夏の暑さを描いてきたものである。この映画では、夏の海辺もひんやりとしていて、海にはいることがかえって怖いような感じがする。そして、この風景の中に、男は始めから人間的な感情を殺したストイックな表情をして登場する。医者が男の行動に興味を示し、過去に興味を示せば示すほど、かえって、男のつっけんどんな答えがきわだつという構造になっていた。

最初からヒントは現れていたのだろう。それはパソコンである。コンピューターは、まぎれもない「道具」である。すべての条件はコンピューターに入力されていたのである。目的の遂行のために、コンピューターはデータを提供し、人間はそれに応じて「道具」に徹して行動する。ちょうど、コンピューターのプログラムの中の命令語がひとつの命令を「実行」すれば、全体がうまく「実行」されるのと同じである。命令語は別に全体に目配りする必要なんかないのである。自分に与えられた命令だけをやっていけばいいのだ。

だから、『ときめきに死す』は、「暗殺ゲーム」の中で「道具」として行動する人間たちを描いてみせた作品なのである。

編集後記

レポートの感想については、以前、ウニの人工授精と発生の実験のことを書いたときにもふれたことがある（第12号）。

はじめての仮説実験授業が、雑誌に載ります。

「たのしい授業」という雑誌（B6判）が、仮説社から出されています。仮説実験授業の記録にとどまらず、いろんな授業をたのしくする試みが載っています。この雑誌の特徴は、依頼原稿がないということです。すべて、書いた人の持ち込み原稿の中から選択されるのです。今年、はじめて本格的に仮説実験授業に取り組んでみました。3年生の「理科Ⅱ」の最初の授業で、《電流》の授業書をやってみたのです。その報告を仮説社に送ったところ、8月3日発売の「たのしい授業」8月号に手直した上で、載ることになりました。よかったら、みなさん読んで下さい。大きい本屋さんで扱っています。

「西さがみ庶民史録」第8号（8月15日発売）にも若干、お手伝いしました。「西さがみ被爆者の会」の人たちの、聞き書きです。女の人たちの座談をまとめたものです。これも、よかったら読んでみて下さい。

7月25日から、8月6日まで、マレーシアのキナバル国立公園およびタマンネガラ国立公園に行きます。神奈川県理科部会の海外研修です。むろん費用は自分もち。国立公園内は採集禁止だそうです。クモを少し見てこようと思っています。

また、研究用のクモ生態事典を編集しようという壮大な計画をたてました。まったくの個人的なものです。ワープロをそのために活用したいと思っています。

暑い夏、御自愛ください。

（1984年7月19日 池田肇用）

生物学者、大杉栄について 池田 博明

大正のアナーキスト、大杉栄は生物学者でもあった。とはいっても、得意の語学を使っ
ての翻訳をよくしたのである。狩りバチの研究の第一人者、岩田久二雄は高等学校に入っ
た1923年に、大杉栄によって訳された『昆虫記』を読んで、その面白さのとりことな
り、バチの研究をすることになったという。この義文閣版『昆虫記』は、その前年192
2年（大杉37歳、翌年虐殺される）に出たのである。大杉栄は賀川豊彦からファーブル
を教えられたという。

ファーブルだけではない。丘浅次郎の「進化と人生」を批判した論文がある。「日本の
科学精神4 オーガニズムの観相」（工作舎、1980年）に収められた論文（1917年
5月）を見て驚いた。たいへんにダーウィン理解が正確である。当時の社会ダーウィニズ
ムの悪影響から脱している。ダーウィンの進化論の「適者生存」「生存競争」の観念が、
「弱肉強食」「優勝劣敗」に結びつくのはた易い。なかなかこのワナから逃れられないの
だ。事情は現代でも同様で、なんでもヴォネガットの次作はダーウィニズムを扱ったもの
だという。ちなみに、ヴォネガットの「ローズウォーターさん、あなたに神のお思みを」
（早川文庫）は、社会ダーウィニズムへの批判となっている。

駒井卓の「ダーウィン伝」（改造社、1932年）には、ダーウィンの「人間及び動物
の表情」を最初に紹介したのも大杉栄であったと記してあったと思う。古本屋で入手した
改版（1942年）の方には、訳書が2冊出たとあるだけで、訳者名は出ていない。大杉
栄の年譜（中央公論社「日本の名著」）にもこの訳書のことは出ていない。1930年の
石川千代松の訳書（春秋社）には、「此訳書は初めに或る人の手に成ったものであるが、
夫れが大層誤って居るので、全部私が直したのである」とある。ダーウィン全集で全訳が
出るのは1938年なので、大杉の訳書があったのかも知れない。訳書がないにしても、
大杉はこの本も読んでいたであろう。

この本は人間の喜怒哀楽の表現が、いかに生物学的基礎を持ち、動物との連続性を持っ
ているかを考察したものである。いかにも大杉栄にふさわしい。大杉は、「僕は精神が好きだ」、しかし「精神そのままの思想はまれだ。精神そのままの行為はなおさらまれだ」
「僕の一番好きなのは人間の盲目的行為だ。精神そのままの爆発だ」と書いた。「精神そ
のままの爆発」を象徴するのは例えば子供の泣き、または笑いであろう。ダーウィンは子
供の表情を詳しく分析している。大杉栄は生物学と比較人類学（現在の文化人類学）の
上に社会学を築こうというプランを持っていた（『獄中記』より）。ダーウィンの「種の
起源」（新潮社、1914年、大杉29歳）やルトゥルノー「男女関係の進化」（春陽堂
1916年、大杉31歳）も訳している。

私達は生物学者、大杉栄にもっと焦点をあててみてほしいだろう。そして、大杉栄が成
しえなかった「社会学」を受けついで築いていってもよいのだ。

クラス会（3年7組）へ寄せて

池田 博明

もと3年7組のクラス会、盛況に行われていることでしょう。ちょうど8月25日は千葉県でのクモ学会の第1日目と重なってしまいました。この次には絶対出たいですね。

そこで、不本意ながら、書面で参加します。

つい先日、放送委員会の人が来ました。先生の思い出のレコードまたは本について語って欲しいというのです。この企画「マイ・ブック、マイ・レコード」は夏休みの委員会の合宿を有効にするための僕のアイデアです。去年は校長先生や岩本雅之先生、竹内先生等の「マイ・ブック」が放送されました。僕自身は今年、放送委員会から生徒会の担当に変わったのですが、昨年建てた計画がつづいているのは嬉しいものです。僕は合唱コンクールのことと、みんなが送ってくれたレコード、モーツァルトの交響曲40番短調のことを話しました。合唱コンクール予選の時のテープを幹事の人に送りますから、みんなで聞いて下さい。

新しい環境にもう慣れたことと思います。

今、3年生でひとり退学しそうな生徒がいます。高校の勉強が自分にとって何の意味もないからというのです。勉強すること本来の面白さ、考えることの楽しさといったもの、それを感じる事が少しでもあればなあと残念です。僕は生徒にあまり勉強しろとは言わないのですが、それでも勉強することが大切だということを感じてほしいと思います。理科の教員が、毎日、「生物学」や「化学」を勉強するのは当たり前です。しかし、他の教科はどうでしょうか。もし僕が今現在、例えば「地理」「歴史」や「古典」等を勉強しようとしないう、する気もしないとしたら、卒業すれば勉強しないことが分かっている教科をどうして高校生に「勉強しろ」と言えるでしょうか。言えないのです。

実際のところ、僕は「理科」に限らず、国語や社会、英語、体育、なんでも好きです。そして、少しでも自分なりの考えを持つと思ってます。生活していくうえで、勉強しなくては行けないのです。勉強するしか能がないのだと言ってもいいでしょう。自分にとって大切なことが他の人にも大切であって欲しい。それが我が勉強観です。

毎日楽しく、時には苦しいこともありましようが、「勉強して」下さい。卒業した人たちに、いつも僕はそう言うことにしています。受験勉強の時よりも、入学したらもっと大変だったとか、入社したら大変だったという話を聞くたびに、よかったなと思うのです。

最近した仕事があります。よかったら是非買って下さい。

東海大学出版会「フィールド図鑑・クモ」（新海栄一・高野伸二著）世界で初めての写真によるクモのポケット図鑑です。僕の撮った写真が4枚、使われています。クモの嫌いな人も自分の子供たちの為に、近所の子供たちの為に1冊買って下さい。売れなくて本屋に積んであるのを見ると心が痛みます。家庭に1冊備えよう。2000円

他に「たのしい授業」8月号（仮説社）、「西さがみ庶民史録」8号もよろしく。

神奈川県高等学校教科研究会理科部会の海外研修に参加して、ボルネオとマレーシア半島へ旅行した。6年前にインドネシアへ行って以来の海外旅行である。海外研修は、この6年の間に、アラスカとニューギニア、ハワイ島へ行っているが、参加しなかった。子供が小さかったせいもあるが、なにより自分のテーマが持てなかったからである。インドネシアへ行った時には、他の生物の先生方の行動力に驚いた。インドネシアそのものよりもびっくりしたのである。借りきったバスが停まる。降りた先生方はパーッとどこかへいなくなってしまう。ものの30分もしないうちに、手に手に目当ての植物や動物を採って帰ってくるのである。帰国した後、それを調べて報告をする。たいしたものだ。

魚市場を見学しても、ただぼーっと見ているのと、市場で魚を調べてやろうというテーマを持っているのとは全然動きかたが違う。ただただ感心しているばかりであった。それで、自分のテーマが持てるまで参加を見送っていたのであった。ようやくクモに集中できそうになったので、参加したのである。もっとも、平井書店で会った小沢先生に誘われなかったら、締切後だったから、参加していなかったかもしれない。

クモの研究者は他に谷川さん（野庭高校）と田淵さん（小田原高校）である。昆虫や脊椎動物よりもクモの研究者の方が多い一行となった。

会としての報告書は目下作成中である。マレーシアのクモはまったく文献の手がかりがなさそうだ。

7月24日夜から成田エアポート・レスト・ハウスに泊まり、25日10時発の台北経由マレーシア航空のDC10に乗る。台北から隣りに坐ったマレーシア人の青年がどうも乗る便を間違えたらしく、マレーシア語でいろいろ訊ねてくるのには参った。困っているらしいのだが、どうにも分からないのである。右隣りの人とそのうち意気統合したようで、ほっとした。ボルネオ島サバ州の首都コタキナバルに着いたのは19時25分。便を間違えた青年は係官に訊ねて、さっさと降りた。いったいどうなるのだろう。自分が乗るはずだった便に積まれた荷物もあるだろうに。

タン・ジャン・アル・ビーチ・ホテルは海辺の最新のリゾート・ホテルだった。分不相応な位である。ディナーに1時間ゆっくりかける。いつもそうだが、食事の時間がとにかく十分とてある。キナバル山へ明日は移動するので、荷物を整理する。USドルをマレーシア・ドルに換金する。ほぼマレーシア1ドルが110円である。同室は伊東さん（鎌倉高校）、蝶の研究者である。

朝になると、もうすでにみんな庭に出て、鳥や植物を観察している。キナバル山が見える。異様な形をした山である。ホテルの壁を歩いているチャスジハエトリが居た。日本のものと同種であろう。9時にバスでホテル前を出て、12時半、キナバル国立公園の事務所に着く。宿舎（シャレット）に荷物を置いて、3時頃から公園のレンジャーが原生林を案内してくれる。我々のグループの担当は20歳程の女性だった。TANさん（中国ではチンとなるそうである。通訳のチン氏が教えてくれた）という。トレイル（歩道）に沿っ

て、植物中心に説明してくれる。英語である。「Please, speak slowly」と頼んでゆっくり、繰り返し説明してもらう。1時間と少し、説明してくれて、彼女は道に戻った。公園内は採集禁止である。しかし、標本がないとどうにも調べようがない。クモ（マレー語ではラバラバ）には関心が薄いようで、管理事務所の展示室には4個体だけ。それもアシダカグモ（Heteropoda）をコモリグモ（Lycosa）としてあった。管びんに若干採集する。夜はアトラス（大型のカブトムシ）を見ようと有志6名で5km先の発電所まで行く。行きも帰りも平地を歩く速度だった。周りを見る暇もなかった。アトラスは見れず、眠る。

27日、小型トラックで発電所まで登る。途中4回程、坂をあがれなくなってしまい、その度に交替で降りて歩く。1台20ドルで頼んだという意味がない。発電所からキナバル山の中腹までのんびりとクモを見ながら歩いた。各種のウツボカズラが有名だそうである。田淵さんが葉を見てみつけるのだと説明された。沢山あった。帰りに小雨がパラついた。後で聞いたら、頂上直下まで行った人もいた。一番高い所まで登ったのは2人の女性である。夜はレンジャーがスライドを見せてくれた。

28日、採集禁止区域から出ようということで、9人でクンダサンの原生林へ行く。トゲグモやメスジロハエトリ属を採った。帰ってきたら大変だった。出発前に、預けた荷物のチェックがあるというのである。来る前の話では、無断採集は罰金もしくは懲役ということであった。一同青くなる。特に添乗員の柳沢さんは緊張していた。いずれにせよ、大変だ。最初に何も採集していない人がチェックに行くことになった。僕も先に行った。たまたまクモは液浸してフィルム・ケースに入れ、その上フィルムの紙箱に入れて、テープで押さえてあったからである。それに中身がゴチャゴチャだったので、問題なくパスできた。案内をしてくれたTANさんの調べ方は徹底していた。洗面道具の中の小箱ひとつまで調べていた。洗濯ものの下へいれたり、それぞれに工夫してなんとか全員がパスしたのは出発予定時刻の1時間後であった。バスの中の話では、どうも動植物のチェックではなかったようだという。植物が荷物からピョイと飛び出してしまった人もいたようだが、笑って通してくれたという。麻薬だろうか。通訳のチン氏によれば、最近、マレーシアが最も困っているのが大麻、麻薬の浸透だという。若い人が結核汚染されている。マレーシアでは、麻薬を売っても買っても死刑だという。それでも後を絶たないという。

一時は本気で心配したのである。この一件によって、次のタマン・ネガラ国立公園での採集は手薄になってしまっただろう。ここも原則として採集禁止だからである。

公園内を採集禁止にするのは自然保護の観点から言えば当然である。学術研究の場合は許可を申請すればいいのだが、これがまたほとんど許可しないのだそうである。もう少しオープンにして、相互交流に努めた方がいい。地元の研究の方が、絶対に有利なのだから。ただ、外国人が標本を持ち出し、新種として記載した場合は国内の研究者にとって大変都合の悪いことになる。タイプ標本が外国にあることになってしまうからだ。日本のクモ研究者もだいぶ苦労している。同様な事情を考慮しているのかもしれない。（続く）

マレーシア紀行 第二報 池田 博明

7月29日、海岸班、山班、市内見学班に分かれる。山班へ同行して、クモ採集に努めるつもり。前夜の打ち合わせでは、標高の高い所に上がっても、クモの種類数は少ないので、近郊の山でよいと言ったのだが、単独行は避ける方針なので、他の人と同じ班でコタキナバルから約80km離れたタンブナンの町へ行く途中の山へ行くことになった。

結果的には、ハエトリグモが4種ほど採れ、ドヨウグモの交接している雌雄が採れた。何か幸運となるかわからないものである。先生方で相談してタクシーの運転手にランチ・ボックス(弁当)をあげたのだが、「食べない」という。肉の匂いをかいて、「バビ」と言っている。そうか。和田さん(厚木西高校)が「回教徒はバビ、豚は食べないのだ。他のものにも匂いがついているからダメだそうだ」と言う。少し山を降りてくると大変に暑い。村の近くでも採集を試みたが、採れなかった。夕食後、日本あてに葉書を書いた。クラブ員に書いたら、28枚になった。

7月30日、朝、ホテルのキャッシャーで葉書を出す。一昨日は日本まで30セントと言ったのに、今日は40セントだと言う。切手を30枚買うのが、大変だった。出してくれる切手が足りないのだ。葉書の1枚1枚に40セント分の切手を載せていって、ようやく無事出せた。ホテルの従業員が切手を貼るのを手伝ってくれた。「You have many good friends in Japan」と祝福してくれた。午前中は船で近くの小島、マヌカン島へ行くのである。昨夜から下痢気味で苦しかった。コレラの予防接種をして来なかったのが、心配になった。予防接種を怠った不心得者は一人だけだった。コレラの下痢は米のとぎ汁のようだそうである。ただの軟便だったが、病気になったら全体にかける迷惑のことを考えると気が気ではなかった。島では泳がず、浜辺で貝を拾った。浜を駆け回っているコモリグモを採った。島から帰って午後からは、腹巻をして寝た。午後に行った人によるとキナバル国立公園のオフィスにはウツボカズラの研究書(倉田重雄著「Nephentes of Mt. Kinabalu」)などが安く売っていたそうである。残念だった。朝はひどい下痢だったが1度だけで止まったので、少し楽になった。18時20分の便でクアラランプールへ飛ぶ。20時40分クアラへ到着。メイフラワーと書かれたバスが待っていた。近鉄と取引のある旅行会社だそうである。その会社のマックさんがガイドである。なんでも日本に7年間、群馬大学にもいたことがあるとのこと。マレーシアは天然ゴムの生産で世界一である。第2次産業は油ヤシ、第3次産業はスズである。言語はマレーシア語、英語、北京語、ターミナル語の4ヶ国語。自動車は日本製が80%、二輪車はすべて日本製。8月31日が26年目の独立記念日であらうから通りが飾ってあった。30分位して、中心街のヒルトン・ホテルに着く。クアラでは最高のホテルである。これまた分不相応の感がある。部屋のキイが紙製のコンピューター・キイである。指定された18階13号室へ行くと、壁に蝶箱があった。

31日、ホテル前からタマン・ネガラ国立公園に向けて出発する。クアラの市内を抜けて、ガラ有料道路に入る。有料道路は少なく、全国で4ヶ所だそうである。タマン・ネガラはクアラの北東にあたる。途中中国人の経営する食堂で昼食をとり、14時15分、ようやく船着場へ着いた。8名、10名、10名と3隻のボートに分かれて乗る。17時10分到着。河を3時間も上るのである。むし暑い。園内のバンガローに泊まる。

8月1日、伊東・谷川・池田の3名はジャングルの河沿いの道を行く。山ヒルが足元で獲物を狙って首をふり動かしている。山ヒルは房総の山でも沢山見たことがあるので、たいてい驚きもしなかったが、沢山見るのは初めてという人も多く、だいたい怖がっていた。かまれると出血がなかなか止まらず始末におえない。まず、県立博物館の生出さんがかまれた。傷口を消毒して出るに任せて50分程で止まるそうだ。3m位の大きな円網をみつけ、先へ行った谷川さんと呼ぶ。網の上に吊った葉の中にクモがいるだろうと、谷川さんジャンプして葉を叩く。クモが落ちてきた。受け止めようとして谷川さんは手袋の先を噛まれる。大型のオニグモである。枯葉に擬態している。

小高い山に登る。急坂で汗だくになった。熱帯の登山は大変である。

21時40分、宿舎の近くの茂みを懐中電灯で見てみたところ、X字型の網を張っているヒシガタグモの仲間 (*Episinus* sp.) を発見した。ムラクモヒシガタグモよりも、ずいぶん足が長い。

2日。採集禁止で網をふれない伊東さんは、本日は釣り。谷川・池田は今日もジャングル・ウォークである。ハエトリグモを数種、樹皮に擬態しているアシダカグモの仲間等を採集した。根性の谷川氏、体長25cm位の大ムカデを採る。夜、夕立があった。

3日。9時15分に船付場から出発、1ソウめの船は途中でエンストしてしまった。4分程で動いた。タマン・ネガラの起点で30分ばかり採集する。公園内で網をふれなかったチョウ採集の伊東さんや園山さんが走り回る。植物研究の人たちも探し回る。しかし、時間が足りないようである。16時30分、クアラルンプールの近くの昆虫標本店「パピロン」に立ち寄る。キイ・ホルダーを土産に買う。思いがけなくも生徒には圧倒的にサソリが好評であった。人気のないのはガであった。コノハムシの標本をM50ドル(5000円相当)で買った。値切れればよかったと後で思った。10ドル位は安くなる。

4日。9時15分、山班はタクシーで郊外のクアラ・クブ、ルイット川流域まで行く。車は制限時速50キロの道路を80~100キロでとばし、追い越す時も車間距離をとらない。生きた心地がしなかった。植物・チョウともに収穫すくなし。クモはメスの住居の上でオスの待つハエトリグモや、ウラシマグモの仲間が採れた。

5日。雨である。荷物の整理をする。書店で図鑑類をできるだけ買った。ミジンコの図鑑まで買ってしまった。図鑑はいくらあってもいいからである。昼は中国レストランでインド風の食事。夕方は中華料理だった。夜、チャイナ・タウンを見た。露店がたち並び、たくさんの人でごった返す。すごいエネルギーである。大道芸のコブラ毒の薬売りのおじさんもいた。23時50分離陸、6日朝6時30分日本に到着した。

相鉄中央劇場で森崎さんの『ロケーション』を見る 池田

9月22日(土)、横浜の相鉄中央劇場へ森崎東監督の新作『ロケーション』を見に行った。小田原では上映予定がなく、平塚では少し先へ延びてしまっている。予定に入っている、あんまり客の入りが悪いと上映されないことがある。小田原東映では『とりたての輝き』がそうだった。看板までかけてあったのに上映されないままになってしまったのである。森崎さんの映画は当たらないことで有名だから、『ロケーション』も2週間の上映期間を持ちこたえるかどうかさえ、不安である。封切り日に見るにこしたことはない。

横浜の相鉄ムービルで映画を見るのはジョン・フリン監督『摩天楼ブルース』以来である。最終回に入ったのだが、約200座席に70名ほどの人であった。数えたのである。けっこう見ている人がいたのでうれしくなった。なにせ札幌松竹で封切り日に『街の灯』を見た時は3名だったのだから。

『神奈川ニュース(横浜・川崎版)』(No. 807)「のびる地下鉄」「六都市合同防災訓練」から始まった。横浜・川崎版の方が画面がよく出来ていた。小田原で見る湘南版はカメラワーク、アングル、編集ともに拙劣なのである。

予告編で『アンナ・パブロワ』や『上海バンスキング』を見る。最近では予告編を見るのが楽しい。小田原オリオン座は3館分の予告編をやるので、それだけでも満足してしまう位なのだ。

まず、『旅芝居行進曲』が始まった。撮影が森田富士郎 美術が西岡善信というもと大映のコンビである。西岡善信は協力プロデューサーも兼ねている。ドサ回りの芝居一座を描いたこの映画を見て、古尾谷雅人は背が高いなあと改めて思う。いつも頭ひとつとびぬけているのだ。主題歌や音楽の入り方は楽しめたのだが、納得いかないドラマがあった。ひとつは、座長が一座の為にでもなく、自分の為にでもない、ドサの血を引いたマリ子さんの為に、彼女の苦悩に答えてやれなかったことへの償いの為に危険な四つ綱をやるというのに、座員みんなが意気を感じて「俺たちもやります」となるところ。座員の心意気がどうしてそんなふうに変化していくのか理解できない。もうひとつはマリ子のいわば男性論である。なぜ男のくせにもっとしっかりしないのかという。それがドラマとうまくかみ合っていない。川島なお美との愛情にしる、父親のふかいなさにしる、ライバル松本千之介の東京での興業の失敗ぶりにしる、描き方が中途半端であった。

さて、10分間の休憩がある。ダイヤモンド地下街の太平寿司で買った折箱「七寸寿司(並にぎり)」(600円)を食べる。腹がふくれて眠くならない心配である。

『ロケーション』は傑作だった。海を走る女を追う。カメラが上がる。一瞬のヘリコプター・ショット、実はオモチャのヘリコプターが兵に落ちる。砂兵にたてた柱が倒れる。夢である。夢からさめた主人公(西田敏行)が仕事場から帰宅するため明け方の街をミニ・バイクでカタカタ行く。裏街通りである。貸間へつくと「エイトマン」の歌を口ずさみながら、水風呂へ入る。西田敏行の裸の背中の中真中に大きなおできがあるのがなんともおかしい。電話がかかってきて、ベッドに寝ていた奈津子(大楠直代)の自殺未遂を発見し

あわてて背負って医者へ運ぶ。まだ夢のつづきのようだ。駆けつけたシナリオ・ライター（柄本明）に主人公が「なに気取ってんだ。方言でしゃべれ」という時のおかしさ。ふたりの間で「ピンク映画なんかやめて、ホカホカ弁当をやろう」という話があったらしい。「ホカホカ弁当」が堅気の仕事というのがなんともおかしい。

奈津子が倒れたり、代役の女優さんがいやがったり、逃げてしまったり、とうとうスタッフは連れ込み宿の女中を女優にする。この女優役が美保純。『俺たちのウェディング』でも田舎っぺをみごとに演じていたが、今回はそれ以上である。過去のある二十歳の少女の不安定な精神を、そのちぐはぐさをよく表現していた。森崎さん流のおかしさはいくらかもある。突然、ヒロインがお盆の墓参りだからといって故郷へ帰るといふ人間の「お盆」や「故郷」へのこだわりぶり、スタッフが一致団結する儀式としての「手じめ」のまじめっぶり、奇妙な三角関係にある三人が新宿騒乱や学園闘争を経験した者であることが描かれていること（『時代屋の女房』の渡瀬回彦も同様な設定だった。森崎さんの映画の学園闘争経験者はみんな景気の悪い、うだつが上がらない連中ばかりである。そして、それはあんまり自分に正直すぎるからなのだ）、中学校の先生（佐藤B作）がピンク映画のシーンに過去のありえた真実を見て、「それが真実だ。真実を撮ってほしい」と叫んでしまうこと、少女の過去の因縁話がからんでくること、無理心中が夫殺し母殺しと噂されていること、紙風船づくりのおばあさん（つげ義春の「ゲンセン館主人」の世界である）、少女が毎にむかって「おかあさん」と叫ぶ声が謝罪なのか真実なのか混乱してくること、突如兵に出現する掘っ建て小屋が少女の昔の家であったり、そこで過去の事件の再現が行われること、それを映画に収めること、まるでミステリー的なぞときの場面である。

少女は母を殺したといわれていた。しかし、今、母が出現する。奈津子とそっくりの宿の女である。「おまえが父ちゃんを殺した」「いや殺していない」。事件のときのことを思い出すんだ。少女は当時のシュミーズを着、ランドセルを背負う。シュミーズは小さくて着ると裂ける。小屋で母は父の首をしめていた。いやそうではない。「おまえは何にも覚えていない」と母は叫ぶ。あれは男と女のことだったのだ。「何故俺がおまえを殺したなんて言った」「そうするしかなかったんだ。それで、ふたりとも生きてっぺ」「俺は生きてなかった。ずっと生きてなかったんだよ」。少女が無口だったのはなまじりが恥ずかしいからではなかったのだ。それから、心中しようと仏が浦のガケの上へ上がったのだ。撮影隊もガケの上へかけあがる。少女を樹へしばりつけているうちに、父はとびこんでしまったんだ。「うそだ。そんならなぜおまえは生きてるんだ。こわかったんだべ」「ちがう。そうだ。そうだ。こわかったんだ。でもうそじゃない」。激情にかられて母は飛び込もうとする。はっとして少女が押さえる。「わかったよっ!」。逆転、逆転、大逆転。

できあがった映画を見て監督（加藤武）は「奈津子さんも成長したね。最初と最後では別人だよ」という。別人という設定で大楠道代が二役をやっているのだから、これはまるで奈津子ではなく、大楠道代に言っているようにさえ思える。そんな仕掛けがしてある。スタッフが作りあげた親子もの大感謝編「濡れてムンムン殺る。」は、性描写の少なさで

おクラになってしまう。「こんな傑作をピンクじゃないからってなぜ上映しない」という怒りの声は森崎映画のファンの声でもある。こんなに面白い映画が他にあるか。

父の供養にと手を合わせる母子の前に灯をともした紙風船をたくさん海に浮かべるシーンは最近の日本映画の中で最も美しいシーンであろう。映画を効果的にするためにわざと沢山浮かべて作ったシーンであるという設定になっている。しかし、物語の感情をよく表現しているのだ。ピンク映画を作る人たちの苦勞話の映画化は『ロケーション』が初めてではない。とうのピンク映画でも作られているのである。たしか野上正義主演、向井寛監督だったと思う。題名を忘れてしまった。それも田中小実昌の小説のようなしみじみとした話であった。森崎さんは全然ちがうドラマにしたたのである。ドラマの主筋はオリジナル（近藤昭二・森崎東）である。

その後、小田原中央劇場でも上映された。一週間の上映終了後も『ライト・スタッフ』の上映前に一度だけ上映されている。二回目は小田原で見た。伏線がしかね、話が懸線展開し、まさに森崎映画であった。脚本は『シナリオ』11月号に出ている。

『頭痛肩こり 樋口一葉』（井上ひさし作、木村光一演出） 池田

8月12日、NHK教育テレビ芸術劇場（9時40分～11時58分）で、浅草公会堂での上演を放映した。井上ひさしの芝居はほとんどすべてを読んでいるけれど、見るのは初めてである。「化粧」をVTRに取ってあるが、まだ見ていないのだ。蚊取り線香をつける間が惜しいほど面白くて、終わったらだいたい蚊に食われてしまっていた。隣の部屋へ寝ていた子供たちも蚊に食われてしまった。ずいぶんかゆい鑑賞となった。

さて、劇は、毎年のお盆の日（7月16日）に本郷の一葉家にいる6人の女が、からむ。夏子（一葉）とその母多喜、妹邦子、母の乳母時代に努めた家の娘稲葉鑓 お八重、花虫という霊。

幕があくと、殆どお盆の日であるという趣向がいい。幽霊が出やすいからだ。花虫が出るたびに決まって客席はわっとわく。井上ひさしの一葉解釈のポイントは、一葉が生きている自分に戒名をつけたということである（「国文学」59年10月号。前田愛との対談による）。世間の常識（「女だから」「戸主だから」など）におしつぶされそうな自分を守るために死の世界へ心移し、世間の常識を玩具扱いにしてやったのだ。「臆病者の護身術みたいなもの」だという。世間からつい外れてしまう人たちを井上ひさしは随分たくさん描いてきたのである。しかし、この芝居が面白いのはそれだけではない。世間の常識についても相対的な見方をしているところだ。その意味で、圧巻はお八重（風間舞子）とお鑓（上月兎）の論戦である。遊女となったお八重はまくしたてる。浴衣を用意し、御膳の支度をする、それが男に尽くすってことですか、と。愚痴を聞いてあげるから、お金を持って来いという商売女だって同じように尽くしている。男の心の中を見てごらん。

お八重の方が分がいいように思えてくる。しかし、お鑓が反撃する。一丁の冷奴だろうが一枚の浴衣だろうが、亭主の好むことをしてあげるのがなぜ悪い、毎日毎日心の中をのぞくなんて気持ち悪い、半年に一度でいいのだ、と。今度は、お鑓に分があるように思えてくる。おそらくどちらも人間の営みとして「せつない」生きかたなのだ。男に尽くす方法といたって一様ではない。また、男に尽くすばかりが女の道でもない。じたばた生きていた女たちがあの世で集うことから、一方が正しく、他方が誤りであるという見方を成立させないように思う。お鑓は歌う。

「わたしたちの心はあなのあいたいれもの、わたしたちの心はあなだらけのいれもの。生きていた頃の記憶がそのあなからこぼれてゆく」。鈴木清順監督の『刺青一代』のセリフを思い出す。「コロコロ変わるから心っていうんだ」。

世の中全体に因果の糸が張りめぐらされている。花螢が自分たちを心中させた根源を探っている。なんと500人目に夏子に行き着いてしまう。夏子が16歳の正月、料理屋の座敷で着物に汁をこぼした女中を許してやらなかったのが原因だというのである。夏子にいびられた女中はその恨みを新入りの女中にあたることで晴らした。そして恨みは転々としてとうとう花螢の心中の原因となったばあさんに行き着いたのだ。しかし、夏子がいう「私がお嬢さんを許さなかったのには理由があります」。花螢は「またか」とげっすりする。夏子の古着を馬鹿にした師匠の中島歌子が悪かったのだ。花螢は出かけて行く。結局、恨みの根源は皇后に行き着く。皇后は日本の情勢が原因と言う。「日本をかこむ世界の情勢が酒井ステという婆さんをして佐助さんの財布をネコババせしめた」ということになる。花螢はあきらめた。夏子は「小説でその因縁の綱に戦さをしかけてやった」とつぶやく。たしかに目に見えない因縁の糸、感性の在りかたを表現するのが小説なのかもしれない。

(仮名)
和田恵美 さん(薬学生)の手紙(1984年8月23日付)から

先日病理解剖を見学する機会がありました。私は幸い身近かに人を亡くしたことがありませんので、初めて死体を側でみたのです。そして、死というものが今まで漠然と考えていたものと違い、甘美でもなく、はかないでもなく、完全に精神活動をしない物になってしまうことのように思いました。おそらく同じ病棟内のどこかで家族が嘆き悲しんでいるはずなのに、解剖室では、全く感情なしに(もちろん医者や化学者が感情的になってはいけなし、感情を表に出さないだけなのでしょうが)、死体を切っているというそのちぐはぐな状態が納得いなくて、そう思ったのかもかもしれません。

私達は人が五体満足で生きていることが普通だと思っています。それでも天文学的な数字の確率の下で、ここで生きているということを忘れているのです。授業で多くの奇形の可能性や、様々な異物や、疾病への因子を体が無意識のうちに排除しているのを聞くと、今生きているということはすごいことではないかと実感します。

ヒトがサルと共通の祖先から進化したという事実を認めない人はいないだろうだが、進化が「生存競争」と「自然選択」「適者生存」によって起こったかどうかということになると、首をかしげる人が多かった。「突然変異」による遺伝子の変化が「自然選択」により種の集団内に拡大するという「総合学説」に疑問を唱える人が多く、その疑問ももっともだったのである。たとえば、今西錦司などもそのひとりであった。渋谷寿夫や徳田御嶺なども環境至上主義及び機能主義的な「総合学説」に対して、生物の主体性を強く主張し進化は環境と生物の間の絶えざる弁証法にあるとしていたのである。

しかし、渋谷にしる今西にしる、思弁的にすぎた。今西は説く。種がだんだんに変化するなんて言っているダーウィンは間違っているという。種は変わりよる時には一斉に変わるんじゃないという。ここまでは正しい。しかし、だから生物には環境に積極的に働きかけていく主体性があるもんやとなると、ついていけなくなる。それでは、まるで神がかりである。哲学としたって時代遅れではないか。私はだいぶ今西進化論や生態学説に影響を受けたし、渋谷の「自己運動論」も面白いと思ったことがあるが、彼等が遺伝学の成果をさしおいて論議を進めていくのには、納得がいかなかったのである。

その思いは集団遺伝学を独学してからは強くなった。集団遺伝学の確率論を無視する進化学説などたわごとであると。今西進化論を哲学的に高く評価する主に京都の人々はダーウィニズムに対する批判勢力として今西説を支持しているのだが、進化論としての今西説の当否を検討していないし、集団遺伝学の数学的方法を今西が理解していないことにもふれられない。今思えば、モノの『偶然と必然』についての哲学者の反応もいたずらに思弁的であった。還元主義や唯物論が批判されるのは悪いことではない。しかし、それによって精神至上主義が持ちあげられるのは困ったものである。生物学の方法はそんなに景気のいいものではない。ようやく最近、生物学のオーソドックスな方法の上になって進化学説を展開しようという試みが現れた。グールドやスタンレーの著書である。彼等は化石を研究する古生物学者であるが、ダーウィンの歴史的な役割や集団遺伝学の成果もよく理解して議論を進めている。グールドの『ダーウィン以来』（早川書房）とスタンレーの『進化の新しいタイムテーブル』（岩波書店）を読んだだけで、説得力があった。

スタンレーは説く。ダーウィンが「漸進説（種はゆっくりと進化した）」を主張したのには様々な要因があると。進化が急激に起こることがあるとすると、当時の神の「創造説」と一見似たものになってしまい、反対勢力に十分対抗できなかったであろう。また、自然選択が気づかれないほどゆっくりとした進化であるとした方が世間に受け入れられやすかった。当時メンデルの遺伝学は知られておらず、生物の器官は複雑だが、適応は完全だと信じられていた。完全なものができるのには莫大な時間がかかり、変化はゆっくりと進むしかないであろう。伝統的な生物学は「自然の詭譎」、つまり自然は生物で一杯でつりあいがとれていると考えていた。そこではわずかな変異が許されるだけである。中間種が発見されていなかった化石の記録を過小評価することで漸進説は否定されずにすんだ。

しかし、現在注意深く扱えば、化石の記録は多くの事実を語る。スタンレーは集団遺伝学の成果を併せて検討し、「断続説（種分化は早く進むことがある）」を主張する。

化石の研究からは一度確立した種は長期間変化しないと言える。氷河期の昆虫はほとんどが現生のものと同一である。また太古からほとんど変化していない「生きた化石」が沢山存在する。突発的に進化が進む例もある。先カンブリア時代末からカンブリア紀にかけての急速な多様化（多細胞生物の発展）や白亜紀の顕花植物の発展、恐龍の絶滅直後のほ乳類の急激な適応放散などである。ウガンダのナバゴボ湖のシクリッド・フィッシュ、ハワイ島のバナナを食べる蟻やミツスイなどは祖先種がほとんど変化していないのに、一部の小個体群の系統に急速な進化が見られる。進化は小個体群で進むのである。

調節遺伝子がひとつ変化すれば進化はきわめて突然に起きる。幼体で産卵するアホロートルを成体にするには一個のホルモン活性化遺伝子でよい。オオパンダはクマの調節遺伝子が2、3個変化して達成したものである。変異は近親交配によって固定される。短期間の近親交配なら必ずしも有害ではない。また、染色体の逆位などが起こった場合、近親交配なら必ずしも適応度の劣らない対が出来る可能性が大きい。

漸進説の影響が大きいのがヒトの起原の問題である。たとえば、素人が見ても現世人類との違いが明らかなネアンデルタール人をホモ・サピエンスにいれる。ホモ・サピエンスと時代が重複するし、ヒトの優位性の偏見から、脳腫の大きい別種がいたことを許容できないからである。断続説では頑丈さに適応したネアンデルタール人を同時代の別種として扱える。ヒトの基本的特徴は、胎児化現象の結果であることが多い。ヒトの赤ん坊はサルの胎児の形である。胎児化は脳の増大に適していた。直立姿勢も胎児化によって導かれたに違いない。未熟な赤ん坊は四足歩行の母親にしがみつかなかっただろう。抱く他ないのである。ホモ・サピエンスの誕生の物語は、おそらくこんな風だった。ホモ属の頑丈な種内に、異常な小個体群が出現した。眉上隆起を欠き顔が扁平で額が高かった。わずかに胎児化するような変化である。少数の突然変異が原因だった。変化した個体は群族から追放され、隔離されたことによって近親交配し、遺伝子は固定された。それがホモ・サピエンスとなる。ヒトでは文化的隔離も重要である。

種分化には多々偶然があり、予測不能である。種分化は一種の試行錯誤過程である。種分化により動物の目や科は稀薄に、知らず知らず、環境を探ることになる。進化の傾向が作られるのは子孫を多く作る種が成功することにある。長命、または繁殖力の大きい種が有利である。新種は常に形成され、その一部は必ず成功する。選択が個体間で起こる水準、小進化と、種間で起こる水準、大進化を区別してもよいであろう。種の絶滅などは大進化で考慮すべきであろう。すべては分子の動態で説明できるとする還元論ではうまくいかない。漸進説では種は環境に細かく調子を合わせていて、外部環境への適応を最適化する傾向があると考えてきた。断続説では、種の柔軟性は限られるとする。個体の進化は環境変化に追従しない。「生きた化石」の柔軟性のなさが良い証拠である。

スタンレーとグールドの著作は様々な示唆に富んでいる。スタンレーの記書には、訳に難がある。

子供は小さな哲学者

池田 博明

ツクツクポーシというセミがいる。夏の終わりに「オーシツクツク」となくセミである。ところが、ある日、千洋が言う。「オーシツクツクじゃないよ。ポーシン、イーヨー、ポーシン、イーヨー、チューィってなくんだよ」。なるほど、そう聞こえるのであった。

絵本をちらりと見て、泉が言った。絵本にはお姫様と王子様が出てくる。「いやな王子様だね。こういうことを言うんだよ。“お姫様 お手をどうぞ”って。王子様 自分で立てないわけじゃないんだよ」。

まんが日本昔話に「あずきとぎ」というお化けの話がある。千洋いわく、「あずきとぎはかわいいそうなんだよ。今はあたらし寺（新しい寺）ばかりで古寺がないから出てこれないんだよね」。

「子供は小さな哲学者」というのは思索社から出た本の題名で、名訳です。ちなみにこの本は私にはちっとも面白くありませんでした。おとなの思考のわく組みに合わせていくだけなのですから。

鹿野忠雄と高橋良一

池田 博明

11月末日、日野市の重島泉先生のお宅へ出かけた。マレーシアのクモについてお話を伺うためである。野庭高校の谷川先生と一緒にであった。クモに限らず、いろんな話をお聞きしたが、その中に鹿野忠雄と高橋良一の話もあった。

鹿野忠雄とは初めて聞く名であった。台湾を始めとする多くの島の動物の分布から、ウォーレス線を修正した人であるという。この鹿野線は生物地理学上、重要な線として世界的に認められたものであるようだ。その論文を見せていただいた。面白かったのは、その線のことではない。

鹿野さんは旧制高校を6年間かけて卒業したのだそうだ。6年以上はいられないのである。しかも、その間ほとんど学校へ出なかったのだ。野山を駆けまわっていたのである。好きな動物観察、昆虫採集、植物採集に明けくれていたのである。英語もドイツ語も自分で勉強し、論文も書いていた。しかし、学校へは出なかったのである。最初の年、ちっとも登校しない鹿野さんに腹を立てて教師たちは留年させる。次の年、登校しないが、業績もあげているし、進級させたら少しは登校するようになるかと考えて進級させる。ところが、相変わらずちっとも登校しない。そこでまた留年させる。その繰り返しで、とうとう学校に来ないで卒業してしまったのだという。重島先生は「当時でも僕はかなわないと思った。いつも高砂族と一緒に野山を歩いて、汚いかっこうをしていたが、それをまた全然気にしなかった」と話す。「その方はどうなさったんですか」「戦争でね」「亡くなら

れたんですか」「いや、行方不明。鹿野さんなら、きっとどこかで生きているんじゃないかと仲間で話したものだが」。鹿野さんのことをなにかに書かれたことがあるかを伺ったところ、まだどこにも書いたことがないという。ぜひ書いて下さいとお願いした。そのときの、壺島先生のお答えが、いかにも先生らしくて感心してしまった。

それはこうである。口で話したことなら、消えてしまう。しかし、書くと残る。生きている人なら、いや、あんなことを書かせてもらいましたよとあやまることができる。しかし死んでしまった人には、そういうことも出来ないから、というのであった。

高橋良一はアブラムシとカイガラムシの研究者である。クアラルンプールの博物館で壺島先生の先生であった。大変な研究者であった。当時、有名なある学者が書いた論文の数が500数編、高橋さんは台湾時代に200編書いていた。クアラルンプールでは400編は書いて、その学者を越すのだと言っていたという。「壺島君、我々がここで研究できるのも、2~3年だよ。今のうちに一生懸命勉強しておきなさい」と言われたという。日本が負けることがわかっていたのだ。そして、昼は採集に出掛け、夜になるとその標本の整理をしながら、論文を書いた。夜の2時まで書いて、2時になると壺島先生の部屋のドアをロックされる。それから、二人でお茶を飲みながら、今書いていた論文について話しをし、「僕は今日、これこれをした。言は何をしたかね」と訊ねられるのだという。毎日であったという。(高橋良一、どこかで聞いた名だな)と僕は思っていた。そうそう、つい最近発行された青木直幸『兵隊を持ったアブラムシ』(どうぶつ社)に「人さしアブラムシ」の発見者として論じてあったのだ。壺島先生はこの本のことは御存知ではなかったが(出版されたばかりである)、高橋良一の標本の8000点は北大に保管されているんですよと教えてくださった。2000点は九大だという。高橋さんは北海道の出身だったのだ。壺島先生の母親も札幌出身であるという。帰宅してから、本を見たら標本が北大に保管してあることも、ちゃんと書いてあった。青木さんは北大農学部出身である。台湾の「人さしアブラムシ」は実はアブラムシの不好カストの兵隊だったのだ。

クアラルンプール滞在中にとうとう高橋さんは400の論文を書いた。携行本に4はいあったという。それを敗戦国日本では用紙事情も悪くて、印刷できなかった。そこでフィリピンの季刊の雑誌に投稿してみたのだという。そうしたところが、他の国から来る原稿をすべて抑えて、高橋の論文だけで4年間、発行してくれたという。日本の学者の苦しい状況がわかっていたのだろうという。「論文を審査して編集委員があれこれ言うなんて妙ですよ。論文の出来は読んだ人が判断するものです。もっとも僕もActaの編集委員をやっていた時、だいたいインドなどから来る原稿を抑えました。悪いことをしたね。会費を払わなかったものだからね」と壺島先生。

昔のような巨人は少なくなったかもしれない。

名人芸と誰でも出来る授業について

～雑誌『たのしい授業』を読みましよう～

池田 博明

11月10日(土)、小田原市民会館小ホールで「林竹二先生の映画の会」があった。伊勢治書店の主催である。映画は、1977年頃、林竹二が沖縄の小学校でした授業の記録であった。最初の「ビーバー」は小学校4年生に人間とは何かを教えるのに、ビーバーと比較しながら話を進めるというものであった。不覚にも途中で居眠りをしてしまったので、感想は控える。2本目は小学校5年生に狼に育てられた子供「アマラとカマラ」を例に引きながら、人間とは何かを教えるものであった。狼に育てられた子供の話は、そのつもりで読めば常に新しい問題を投げかけてくれる。例えば、亀井秀雄は、『現代の表現思想』(改訂版では『身体・表現のはじまり』)で、青年医師イタールの『アヴェロンの野性児』を考察しながら、表現に関する理論を検証している。そんなわけで、何をどれだけどのように教えるのか、大変に興味があった。

「アマラとカマラ」という授業での結論だけを言ってしまうと5分とかからないであろう。人間は人間として生まれるのではない、人間として育てられることによって人間となるのだということである。それを授業では、40分かけて話題の周辺をまわりながら、次第に固めていくのであった。「アマラとカマラ」に関する色々なエピソードが次々に紹介される。生徒は「えーっ」という表情をする。無論、退屈そうに話を聞いているだけのこともあるのだが、要所では微妙に反応するのであった。なるほど、自分の教える教材について具体的によく知っていること、あまり沢山知識をならべたてず、ほんの少しの要点を例証をあげて理解させることが大切なのだということが、よくわかるのであった。

いちばん印象的だったのは、生徒がノートもテキストも鉛筆も用意していないことであった。つまり、自分の頭しか使わないのである。あとは林竹二の用意した絵や写真を見たり、話を聞くだけ。それで時間いっぱい過ごすのである。このこと、生徒が自分の頭以外の何も準備しないということは林竹二の授業のやり方と密接に関わる重要なことだろう。丁度、寄席に話を聞きに行くようなものである。

林竹二の授業から学んだところは他にもある。それは氏の授業が「名人芸」であるということであった。しかし、現在の私は反語的にひびくことを承知でいうならば、名人の授業は素晴らしいが、教員みんなが名人を目指すようになるのは困った事態だと考える。当たり前前のことだが、誰もが名人になれるわけではないからである。

フツーの人が先生をしているだけであって、みんながそのことを忘れてしまうのは困ったことだと思うのである。親も子供も先生自身も仲間も同僚も、そのことをよく忘れる。これは教師聖職論とか、教師労働者論とは全然ちがう次元で言うのである。だから、先生だって人間だなどというのではないのである。そんなことは当たり前なのだ。渡辺一夫が「ほんとうの教育者はと問われて」で書いたこと、本当の教育者はそれを求める人間のいるところに現れるのだということの重要性は正しく理解されなかったのではないかと私は考える。ゆっくり考えないからである。渡辺一夫の言った意味は、人間誰もが教育者であ

り、生徒なのだということである。つまり、先生も生徒なのだ。

「先生がフツウの人では困るのだ」と妻は力説する。先生は生徒のために、授業のために身を粉にしても努力をすべきである。ひとりひとりの生徒の動向に目配りし、適切な指示をすべきである。いじめっ子には注意をし、いじめられっ子を守る。自分の教える教材には責任をもつ。知らないことがないように、できないことがないように、努力する。例えば、泳げないのに水泳の指導はできない。ピアノがひけないで歌の指導はできない。それなのに現実には、ちっとも努力しないのだ。そんな人は教師をやめなさいと。

自分もできないことを生徒に過大に要求したり、毎日を飯のタネぐらいにしか考えないような教師がいて、しかもその被害者が子供とあっては、怒るのも無理はない。しかし、私はできないことがあり、できることもあるのが人間なのだと思う。先生はそれを教えればいいのか。ラジオで中村メイ子が広中平の母のことを話していた。「目はどうして小さいのに大きな世界が見えるのか」と子供が質問すると、その母はこう答えたそうである。「ほんに不思議やねえ。かあさんにはわからんが、勉強すればわかるんじゃないかろうか」。質問がいくつか重なると村の和尚さんや学校の先生の所へ連れて行く。「この子がこんなことを聞いております。わたしには答えられんで、よろしく教えてやって下さい」と頼んでくれたそうである。この母は「理想的な」「先生」だったのではないだろうか。子供と一緒に驚いてくれる、子供に答えをみつける方法を教えてくれる。世の中にはいろんな能力を持った人が沢山いるのだ。なんでも分かる人、なんでもできる人はいないのだ。そして、誰でもなにかひとつは教えてくれるのである。

『たのしい授業』（仮説社）という雑誌がある。教員でなくとも「たのしく」読める。当世風思想のわなに気づかせてくれる記事が多い。仮説実験授業研究会が中心になって編集している。授業の方法は名人芸とは別である。誰がやっても同じ授業になり、誰がやっても生徒を感動させる授業になるという所がミソである。工夫する教員ほど自分の授業に自信が持たなくなってしまうというのが実情である。そして、いろんな研究会に参加して他の「名人」教師の記録報告を学び、帰ってきて自分で試みては、うまくいかず、自らの無能さを思い知らされるのだ。そういった悪循環から解放されるにはどうしたらいいだろうか。発想を転換すればいいのだ。『仮説』の思想はこうである。「たのしくなければ学ぶ価値がない」。教える先生もたのしい。教わる生徒もたのしい。それが大切だ。ペンキョーというものはねじり鉢巻でやるものだというイメージがある。ペンキョーというのは、いつもドリョクと隣り合わせである。しかし、『仮説』はちがうのだ。生徒は言う。「センセー、仮説やろうよ」と。なぜか。「楽だから」。楽な勉強なんてあるものかと大抵の人は怒ってしまうであろう。しかし、『仮説』では「それでいいのだ」と自信を持っているのである。「楽しくなかったが、わかる」授業より、「わからないが、楽しい」授業が正しいのだと考える。なんのために学ぶのかという発想の原点が違うのだ。

林竹二の授業では生徒がディスカッションしない。名人がひたすら話すだけである。時どき林さんは質問をする。しかし、正解は林さんの頭の中にあるのである。それと同じも

のが生徒から出てこないと話が進まない。うまく出てこない林さんは生徒の発言を補ってあげる。「君の言いたかったのは、こういうことじゃないかな」と。こういう導き方の上手下手というのは教員の技量と関係があると思われるので、私たちがよく同じようなことをやっている。ひと昔前ならば、私も感動したかもしれない。しかし、今はさほどいいとは思えないのだ。『仮説』の思想はちがうのである。違う答えも、間違っただけでも、まずその存在を認めてしまうのである。「なんとなく」という理由でもいいのである。何が正しいかは事実があるいは実験が決める。『仮説』ではディスカッションがあらかじめ準備されている。『仮説』を知らない人にはテレビの「クイズ面白ゼミナール」や「動物わくわくランド」を連想してもらえばいい。それに近いのである。他人の違った意見をききながら人は自分の考えを確認していくものである。その違った考えを聞くという段階が林さんの授業にはない。

選ばれた言葉を無駄なく使い、雑談までも組織化された見事な授業を展開しても、生徒は必ず自分なりの理解をしているものである。つまり正しく理解してはいないのだ。誤解してしまうのだ。思い込みをするのである。言われたことをその通り理解するというのは大変な能力なのである。それを正すには、自分の誤解をいったん外に表してみなければならぬのである。『仮説』にはそれを出す方法がある。

ガリレオの講義は評判であったという。ガリレオはまず、当時信じられていた法則を一見非のうちどころもない程、見事に説明して学生に納得させてから、次にその誤りをひとつひとつ突いて、とうとう全部をひっくり返してしまうという方法をとっていたのだそうだ（中央公論社『世界の名著』の解説より）。この話は大変に面白い。

昇壇のところ、私の授業はけって『仮説』でも「名人芸」でもない。どっちつかずというところである。

ところで、理科Ⅱ後半の3クラスで仮説実験授業の授業書『ものとその電気』を扱ってみた。静電気を扱うのでお天気が悪いとうまくいかないのである。第1部は検電器を使って、物はこすると電気が起こること、二種類の電気があること、静電誘導と分極を教えることになっている。第2部はネオン管を使って、金属（アルミホイル）中の自由電子の動きを捉え、静電誘導から電気盆やライデン瓶の機能へと発展させていく授業書である。正式な仮説実験授業ではなく、討論を省略し、ときには理由の発表も省略した形で、のべ6時間、『仮説』もどきの授業を行った。

それでも生徒には面白かったようである。『仮説』では必ず、生徒に授業の評価をさせる。5段階評価である。面白さの評価は3クラスで、第1部は⑤（大変面白い）50名、④（まあまあ）58名、③（普通）10名、②（あまり面白くない）3名、①（全然面白くない）1名、第2部は⑤85名、④28名、③7名、②2名、①1名である。理解度の方は第1部 ⑤（よくわかった）12名、④（まあまあ）60名、③（普通）43名、②（あまりよくわからない）7名、①（全然わからない）0名、第2部に関して⑤10名、④52名、③48名、②11名、①2名である。第1部はまずまずの面白さで、ほぼ理解

でき、第2部は面白かったが、ちょっと理解が不十分というところであろう。

生徒の感想をいくつか拾う。蘆田裕子「“ガラス棒をこすったって電気がおきるわけない”なんて恥ずかしい事を真実だと思ってました。どの原子も+と-の電気を持っているなんて忘れていたことを思い出しました。簡単な問題でも予想をたてて当たった時などなんだかうれしくなり、授業がとても楽しかったです」。野中悦子「なぜ? どうして? など学問の原点に返ったような授業方法で大変興味深かった」。加藤雅子「始めは信じられなかったけれど、いろいろ実験をやっていくうちに“あーそうなのか”と理解できて、自分たちの周りの中に面白いことがまだまだひそんでいると思った。面白かった」。誰がやっても同じ結果になるのである。

『仮説』の授業は授業書どおりにやるだけである。雑談もしないし、程度を落とすわけでもない。ただ生徒自身の中に本来ある「考えるパワー」を外化させるだけである。そして学問本来の姿、科学の心を伝えようというのである。

郵便往来 ～ いただいた御手紙の一部を紹介させていただきます(池田)。

山内「『プレイガイドジャーナル10月号の“ギャー横丁”に池田さんの“東風”がふられていました。追って紹介してゆくそうで、たのしみです。私は映画も見ないで、セーターづくりに励んでいます。もう、あと片袖だけになりました。中細糸で編みこんだのは、エゴン・シーレの目画像。これが前側で、後ろはエゴン・シーレのサインと生年1890年と、没年1928年。約1カ月かかったことになります。この夏、冗談で「橋本治の男の編み物手とり足とり」という本を買い、とうとう編み物を始めることになりました。あつというまにベストができたので、あみこみセーターにとりかかったら、毎日、強迫観念にとりつかれたみたいに型紙とにらめっこして手を動かすはめに陥りました」。

柏木「『体育の日に“佐々木昭一郎の世界Part VI”に行き『四季・ユートピアノ』を見てきました。近々ビデオが発売されるそうで、今回は最後の上映になるとのことでした。(中略)映画『カルメン』をやっと見ることができました。フラメンコがああいったものだったとは知りませんでした。特にアントニオ・ガデアスの踊りは、すべての動きは静止するためにあるといった感じで、非常に緊張したものでした。限られた、というより、ムダの全然ない動きの中で、とても深い力を感じさせるのです。さて、放蕩娘の私は『カルメン』を見終わった後、休講なのをよいことに横兵へバレエを見に行き、急性愛国病患者になって帰ってきました。森下洋子は外国人の中で踊ると、うまく言えませんが、ますますきわだつのです。第一、彼女は音楽そのものです。そして、今日はアメリカン・バレエ・シアターの公演に行ってきました。悲しいことに、がっかりしてしまいました。バレエの「19世紀の遺物」といった面がもろに感じられました。私はバレエが好きなのです。バレエの事だったら一日中でも話ができるでしょう。でも、そんなのを聴く物好きな人はいないので、私は書きます。話す分だけ一日中も書いて書くのです」(11月)